

富山日報

小天地

強迫症を患ふ者を利用して已に其面を保持し或は虚榮を満足せしめんとする者は、火事水災に比して其罪惡を重し、眼に類して一塊のパンが腹に生じ、其に對して無罪を宣告する國あれば、則ち富山地方にて發見するや如何に強迫症を患ふ者に對しては恐らく重罪處分を科すべしと思はる(冷)

島崎夫人を思ふ

(上)

島崎夫人の奥さんがおなくなりなすつた、と最初新聞で見ました時、私は吃驚しちまひました、で、さういふおかしな事、何かの間違ひかも知れない位に思はれて、否、強ひて左様考へ度いと思ふのでした、讀めばはなしで、島崎さんが絹毛へ御旅行の御途中、お産でなくなりなすつた、と、くわしい事を承知しまして、全く全くがっかりしてしまひました。奥様の事を考へますと、私は悲しくて平常から人一倍感情の激しい私は、もうくヒステリーになつて了ひ相です。お産でなくなりなすつた、可愛い赤様を残して、斯う考へる女の方は堪へなく悲しう御座います、全く人事とは思はれません。

「全く人事ぢやない。」此言葉についても思ひ出が御座います。

あれは川上眉山氏が御自殺なすつた時でした、恰度六月のことでした、島崎さんの何かのお作の中にも、五月から六月へかけて新緑の頃になると、兎角人は種々の記憶を思ひ出し、種々のことを胸痛むまで考へさせられるものだ、と云つたことが書いてありますが、全く私共女達でさへ、何だか斯うしんみりと思ひ勝ちに、良人なごも夕方なぞよくほんやり縁側の柱にもたれて、蒼ざめた淋しい顔を致して居りました。

「川上眉山が自殺した。」

社から歸るなり良人は火鉢の傍で、云はうやうやない淋しい嚴肅な顔をして、むつ、り考へ込んだまゝ、その日は晩の御飯も疎かに頂きました、すぐ書齋の方へ引籠つてしまひました、三十分一時間、コトリミの音もしません、若しや……と思ふと堪らなく心配になつて書齋へ行つて見ますと、部屋中央に燈籠がだまゝ、何を考へてか甚くむつかしい顔をして、ぐつと向ふの窓の障子を見据ゑてゐるんです、恐くなつて茶の間へ連れ出さうとします。

「大丈夫だよ、乃公は自殺はしない、さういふ其晩はそんな風で明まして二三日後、島崎さんの奥様にお目にかかります。」

「全く人事ぢや御座いません、何でもあの晩は甚く考へ込みましてねえ、私は心配で心配で、以前もあなた、北村溪谷さんが芝で首をおつりになる、一休文學者は創作で困りますのねえ、」

だがその奥様も遂々なくなりなすつた。

富山日報

小 天 地

「理髮に一時は情しいなア」
「所い僕は一時間半ばかり、
塔つたものでない」
「さうです
マリカンを買つてやり合はう
ぢやありませんか」
「うれがよ
い」
「致て理髮業者を戒む
時間の觀念なき態度は必ず失
敗に終る事な冷」

島藤村夫人を思ふ

(中)

産れ落ちるから母さんのない乳呑児を
抱えて、まだ聞きわけのない幼いお兄様
をすかしながら、奥様の柩を御送りなさ
らなければならぬ島崎さんの御心中、考
へるにお氣の毒でたまりません。
これから後の御不自由、お涙おくな
りなすつた奥様が何彼と行き届いて、一
点の申分もなくいらつしやつたわけそれ
だけ、お残りなすつた方々のお涙もまた
一杯で御座います。
本當に奥様程忠實に、家庭のためにお
盡しなすつた方は御座いますまい。
身をあけて島崎さんの犠牲となすつた

私は斯う申してはばかりません。

三十八年だと思えます。あの有名な「
破戒」をお書きなされたため、島崎さんが
信州の小藩から大久保にお移しになつて
其頃度お身おな奥様と、三人のお兄
さん、都合五人の御家族が、ちんまりした
植木屋の家を借りて、極めて質素な生活
をお初めになりました。

極めて質素な生活に申上ても、其頃も
うに新体詩人としての島藤村の名を
御承知の御座は、それは詩壇の明星とま
で呼ばれる人として、比較的質素なのだ
らう位にしかお考へなさいなうでせうか
事實島崎さんの生活は一月二十五圓と
限られて居たのです。一月二十五圓と
部會では學生一人の生活にも、重荷不足
勝ちで御座います。其二十五圓で一家
五人の生活

